

【↓P32_タイトル】

My
Keyboard
Studio

【↓P32_名前】

Namba
Hiroyuki
難波弘之

【↓P32_クレジット】

撮影：菊地英二

【↓P32_プロフィール】

Profile●キーボーディスト、作編曲家、音楽プロデューサー。学生時代よりプロ・キーボーディストとしての活動を開始。金子マリ&バックスバニーに参加後、さまざまなステージで活躍し、映画・CM音楽も多数手がける。現在も山下達郎、SENSE OF WONDER、ExhiVision、THE HITS!?!など数々のバンドで精力的に活動するほか、FUKUSHIMA Recordsの音楽プロデューサーとしても手腕を奮っている。(www.vega-net.ne.jp/Namba/)

【↓P33_リード】

70年代から現在まで、日本を代表するロック・キーボーディストとして活躍している難波弘之。マンションの一角に設けられた彼のプライベート・スタジオには、ところ狭しとビンテージ・キーボードが収められており、その壮観さに圧倒されるばかりだ。難波サウンドを支えるその機材群を、さっそく紹介していこう。

【↓P33_小インタビュー】

●このスタジオで作業するメリットとは？
○やっぱり、使いたいビンテージ・キーボードがあったらすぐ手伸ばして使えるということですね。特にRhodes MarkIは長年愛用しているもので、サンプリングされたものには出せない独特なサウンドになってきているんです。ほかにもここでしか鳴らせない音というのがたくさんありますね。

【↓P34_本文①】

▲鍵盤は上からコルグ800DV、Minikorg 700S、Rhodes MarkIStage 73、コルグKorgue。800DVの下に設置されているのは、テープ・エコーのコルグSE-500。“初めての鍵盤が、学生のころに40万円くらい出して買った通称デカ・オルガンのKorgue。当時組んでいたディスコ・バンドでたくさん仕事をして、そのバンド貯金で買ったんです。その次に手に入れたのがMinikorg 700Sですね。ギターのチョーキングに負けたくないの、ピッチベンドを特別に付

けてもらいました。そして、プロになる直前に購入したのがRhodes MarkI。この下から3段目までのセッティングは、金子マリ&ボックス・バニーで演奏していた当時のセッティングそのままです。800DVはプロになってから買ったもので、主にレコーディングに使っていましたが、あとでCV-GATE IN改造しています。なぜか喜多郎さんのサインが入っているんですが（笑）、これは僕がコルグから購入する前に、彼がレンタルで使ったときに入れたものだと思います”。

【↓P34_本文②】

▲最上段にコルグMS-20を、その下にベスタ・ファイアRV-11、コルグPS-3100、CX-3を設置。“MS-20は80年代前半に次々とシンセを買っていたころに購入したものの1つです。結構エグい音が出るので、主にライブでシンセ・リードや効果音用に使っていましたね。PS-3100は初めて買ったポリフォニック・シンセで、79年ごろに山下達郎バンドでよく演奏しました。MS-20と違ってエグい音はあまり出なくて、内蔵されているコーラス・エフェクターを使って、柔らかいサウンドでコード弾きをしていました。これらは音色メモリー機能がないので音作りが結構大変です。その下のCX-3は僕にとって2代目のオルガン。デカ・オルガンは持ち運びが大変だったので、特殊な音が欲しいとき以外は使わなくなっていったんです。オルガンはこれの後にハモンドXK-2、そして今はコルグNew CX-3といろいろ変遷していっていますね。旧型のCX-3はもう1台あって、京都RAGというライブハウスに置きっぱなしにして使っています”。

【↓P34_本文③】

▲コルグΛ（ラムダ／上）、ローランドVocoder Plus（下）。“ΛはSENS E OF WONDERのパッド専用機として、80年代から今までずっと使っているんです。オクターブで重ねたストリングスに、さらにオルガン系の音色を重ねて、コーラスをかけて弾きますね。SENSE OF WONDERのセッティングは正面にΛ、その上にシーケンシャル・サーキットProphet-5とコルグKronosを乗せ、左手側にもう1台Kronos、その上にNew CX-3、Minikorg 700Sを置く計6台です。Vocoder Plusは1981年に三枝成彰さんの「RADIATION MISSA」に参加したときに使いましたが、ほとんどそれだけです。6年前に津山音楽祭で「RADIATION MISSA」の再演をやったときにまた引っ張り出して演奏したくらいです”。

【↓P35_本文④】

▲アープ2600。“これは80年代に友達から譲ってもらったもの。完動品で、今でもレコーディングで使っています。今年の6月にシンガー・ソングライター玲里のアルバム中で演奏しました。壊れるのが怖いので、ライブに持っていくことはないですね”。

【↓P35_本文⑤】

▲2600の手前に設置された、アープPro Soloist（上）、ホーナーClavinet D6（中）、Prophet-5（下）。“Pro Soloistは80年代に購入したもので、音色を変えるタブレットの接触が悪くなってしまったり、アフタータッチの調子がおかしくなったりしたので、一度修理しています。これもこの間の玲里のレコーディングで弾きましたね。Clavinet D6は79年ごろに島健から中古で買ったものです。これを使って、SENSE OF WONDERでエマーソン、レイク&パーマー「ナットロッカー」をカバーしました。Prophet-5は、メモリが増えるのを待ってから購入したので型番としては後期のものですね。コルグやモーグのシンセとはまた違う、Prophet-5独特の透明感のある音色が好きで、もう30年ほどずっと使っています。鍵盤の接触がすぐ悪くなってしまうので、しょっちゅうメンテナンスする必要があるんですが”。

【↓P35_本文⑥】

▲上からモーグMinimoog、コルグPolysix、オーバーハイムMatrix-12。“僕はもともとモーグ使いではなく、コルグのシンセとProphet-5を愛用していたので、実はMinimoogを手に入れたのはプロになって結構たってから。鍵盤がダメになってしまっているものを友達から譲ってもらったんです。MIDI改造をしているので、音源としてステージの横に置き、別の鍵盤を弾いて音を出しています。Polysixは80年代に購入してからずっとお気に入り。これも実はもう1台あって、共にMIDI改造しているので、2台使ってステレオで広がるように鳴らすんです。オーバーハイムのボイスを分けてステレオで鳴らす機能をこのシンセでもまねしたかったんですね。Matrix-12は自分のアルバムから商業音楽制作まで、80年代のほとんどのレコーディングで使っていました。”。

【↓P35_本文⑦】

▲壁際に設置されているアウトボード類。写真左上からMOTU Midi Timepiece、Midi TimepieceII、ケントンPro4、ヤマハMEP4、カーツウェルK2000R、アカイS5000、イーミューProteus 2000、Proteus Orchestra、マリオンMSR-2×2、写真右上からヤマハFS1R、コルグSG-Rack、01R/W、A1、カシオFZ-10M、コルグSDD-3300、ヤマハGQ1031、TCエレクトロニックTC1140、DBX 166、ローランドSDD-320、SDE-2000、TOA D-2、ローランドM-120。“ラック機材は90年代のころはよく使っていたんですが、今使用することはあまりないですね。S5000、FZ-10Mなどのサンプラー類はコルグTriton StudioがCD-ROMを読み込めるようになってから、FM音源のFS1RはコルグOasysにMOD7が搭載されてからほとんどスイッチを入れていません。これらのラック機材の中でよく使っていたのは、トム・オーバーハイムが作ったMSR-2。Matrix-12と同じく、ステレオで鳴らすために2台用意して演奏していましたね。今でも立ち上げるのはCV-MIDIコンバーターのPro4ぐらいで、2600や800DVをMIDIで動かすときに使っています”。

【↓P36_本文⑧】

ミキサー卓。コンソールにはマッキー24/8を使用している。モニター・スピーカーはメインにヤマハNS-10M Studioを据え、その上にボーズMM101を設置。コンピューターはアップルMacintosh G4で、アヴィッドPro Tools 7でレコーディングを行う。右横にあるラックはオーディオ・インターフェースのデジデザインDigi-002 Rack Factoryや、ローランドSRV-2000などのエフェクター類。“このスタジオではほとんど自分1人でレコーディングしかしないので、卓はこれぐらいのセッティングで十分なんです。本当はミキサーもそんなに大きいのはいらないんですけど、前から使っているのものでそのままにしています。たまにここで簡単なバンド・リハーサルをやることあるのですが、そのときに音をまとめるのには重宝するんです。一応普通のマンションであり大きな音は出せないなので、壁に吸音材を多めに貼りました。”

【↓P36_本文⑨】

メインの作業キーボード、コルグOasys 88とKronos 61。“ピアノ・タッチのOasysをマスター・キーボードにして、KronosはMIDIでつないで音源として鳴らしています。今仕事で使うのは圧倒的にKronosが多いですね。ピアノ、エレピはもちろん、オルガン、アナログ・モデリング・シンセ、FM系の音源も内蔵していて、さらにサンプラー機能があってアカイのライブラリーも読めてしまうので、デジタル・シンセ系ならほぼこのセットですべて済んでしまうんです。ライブで演奏するときは、Kronosの88鍵を使用しています。前までOasysを使っていたのですが、重くて大きくて大変でした”。

【↓P36_小見出し】

Other Equipments

【↓P36_小リード】

難波の所有機材には、このスペースには置ききれずに別の部屋に閉まってあるものもたくさんある。ここではその中からボックスContinentalとドンカマチックMinipops 5を紹介しよう。このほかに、ヤマハDX-7、カシオCZ-1と、コルグM1、T3、Trinity、Prophecy、Wavestation、Triton Studio、Triton Extreme、M3、01/W FDがあるそうだ。

【↓P36_本文⑩】

VOX Cotinental。“これは90年代の半ばに、東京・高円寺に当時あったジャンクション・ミュージックという楽器屋で購入しました。でもTHE HITS!?!を始めるまではそんなに弾くことはなかったですね。THE HITS!?!ではオルガンだけを弾くのがコンセプトなので、これとコルグNew CX-3とデカ・コルグをたくさん弾いています”。

【↓P36_本文①】

京王技術研究所（現コルグ）が開発したリズム・ボックス、ドンカマチック Minipops 5。“1997年に『トッド・ラングレン・トリビュート』というアルバムに参加したときに「Medley」という曲で使いました。MIDIも何も付いていないシンプルなものなんです、アナログ感たっぷりの良い音がします。”

【↓P37_小見出し②】

Hiroyuki Namba Interview
難波弘之インタビュー

【↓P37_小リード②】

最後に、スタジオの使い方から機材のこだわりについて話を聞いた。現在の仕事への思いも含めて、難波の音楽に対する考え方を読み取ってほしい。

【↓P37_大キャッチ】

僕にとってビンテージ機材は特別なものではなく
日常的にそこにあるものなんです

【↓P37_インタビュー本文】

- このスタジオを使うようになった経緯は？
 - もともとと同じマンションの4階を事務所にしていて、だんだん機材が増えてきたので、7、8年前にこの1階に引っ越してきたんです。それでも機材が多過ぎるのでいくつかは別の倉庫のようなスタジオにおいていたのですが、それが最近なくなってしまったので、現在はすべての機材をこのスタジオに移してある状態です。まだ並べ切れていないものもたくさんあるんですが（笑）。
- このスタジオはどのような用途で使っているのですか？
 - ここでは主にデモ制作やキーボード・ダビングを行っていますね。レコーディングをすべて行うというわけではなく、あくまでベースとなる元データに、音を足したり編集したりするぐらいです。
- スタジオで行う作業の流れを教えてください。
 - プリプロを行うときはまず自宅で作曲やアレンジを進めて、それをKronosのシーケンサーに手弾きで打ち込んでいきます。キーボード・パートはもちろん、ドラムやベースも全部演奏しますよ。そのデータをここに持ってきて、いろいろ音を差し替えてデモを完成させていくんです。そうして外のスタジオでギターやドラムなどのレコーディングを行い、最後にここでキーボード・ダビングをしていきます。
- それにしても本当にたくさんのビンテージ・キーボードがありますね。
 - これでも結構処分したんですよ。アカイのサンプラーは歴代のものがすべてあったり、イーミュエEmulatorIIも持っていたりしたんですが、**さすがにもう置き場所がないですしね。**
- ビンテージへのこだわりを教えてください。
 - こだわりと言いますか、僕にとってビンテージ・キーボードというのはそん

なに特別なものでなくて、むしろ日常的なものなんです。たまたま持っていたものを大事に使っていたら、こうやって残ってしまったということなんです。僕は決してコレクターでもないし、ビンテージ・マニアというわけではないんです。

●お気に入りの機材はありますか？

○全部お気に入りだからとってあるという感じです。思い入れが強いものとなると、今でも愛用しているPolysix、Minikorg、Prophet-5、Minimoogあたりで、これはライブやレコーディングでよく使います。あと、やっぱりローズ・ピアノは好きですね。当時の部品を用意してメンテナンスして、大事に使ってきています。

●レコーディングではやはりビンテージ・シンセを多く使うのですか？

○ビンテージのものはやっぱりシンセ・リードとか、あとは効果音など味付け程度に使うことも多いですね。でもデジタルであろうがアナログであろうが曲に合った音色選ぶので、むやみやたらにビンテージ機材を使うというわけではないんです。もちろんアナログ・シンセを使ってほしいという依頼が来たらたくさん使いますが（笑）。

●ソフトシンセは使わないのですか？

○今のソフト・シンセはどんどんクオリティが上がってきているので、新製品が出るたびに試奏はしていますよ。ただ、やっぱりレイテンシーが気になるので積極的に使うことはないですね。弾けばそこから直接音が出るという楽器を触っていると、どうしても遅れが気になるんです。それに、僕はやっぱり生楽器を使って、人と人が顔を合わせて作る、人力の音楽というものが良いと思うんですよ。現在僕が参加しているFUKUSHIMA Recordsの作品も、そういったことをコンセプトにして作っているんです。

●FUKUSHIMA Recordsは難波さんがサウンド・プロデューサーとして関わっているプロジェクトですよ。これまでにコンピレーション・アルバムを4枚リリースしていますが、これはどのように始まったのですか？

○震災後、このレーベルの代表が支援物資を福島に届けに行き、そこで昔からの知り合いの地元の企業の方と話をしたんです。特に大きな困難に見舞われた福島を、明るくて楽しい音楽で盛り上げていこう、と。そこから始めて、ほかの企業も賛同してくれ、CDを作る資金ができていったんです。このプロジェクトでは地元の銀行と“子供未来基金”というのを作って、上がった利益の一部を福島の子どものための基金として残していくということもしています。

●難波さんはサウンド・プロデューサーとしてどのようなことを担っているのですか？

○主に収録する曲の選曲ですね。こういう曲を書いてくださいとか、この曲のカバーをやりたいって言ってミュージシャンの方に賛同してもらったり。僕自身も参加アーティストの録音に参加したり、Happy Islandsというユニットを組んで、毎回書き下ろしの曲やカバーを収録しています。そのデモはやっぱりこのスタジオで作っていますよ。

●今後このスタジオをどのようにしていきたいですか？

○今のところは作業に何も支障もないし、十分居心地の良い空間になっているので、とりあえず何かこういうふうにしたいというのはありませんね。でも、パソコンはさすがにそろそろ買い替えたいなどは思っています（笑）。

●難波さんのご自身の活動は今後どのように？

○僕の中ではロックというのは現在進行形の音楽であるので、どんどん新しい音楽を作っていきたいと思っています。プログレだけではなく流行の音楽とか、売れている音楽にも興味があるんです。そういう嗅覚がなくなるとただの懐メロ・ロック親父になっちゃうでしょ（笑）。だから、THE HITS!?!という

ユニットでは、レッド・ホット・チリ・ペッパーズの曲をオルガンでカバーして、クラブやライブハウスで、若い子たちと一緒に演奏しているんです。僕らのことを知らない若い子たちが、僕らの演奏を聴いて“いいじゃん！”って言ってもらえる、そういう方が面白いですよ。僕は”プログレの人”っていうイメージがどうしても強いみたいですけど、それだけだと意外性がなくて広がりもないので、“ええっ！ そんなこともやっているんですか？”って驚かれるような、新しいことをどんどんやっていきたいです。